

ホイボン村からゴールドトライアングル（チェンセン）へ

9月16日講義

ホームステイ先のホイボン村より一路チェンセンに向かう。途中少数民族の村、国境の町、メコン川対岸にラオス、ミャンマーをのぞみながら講義を受けた。

講師：木村茂

キーワード：河川、国境、商品流通、民族のモザイク、ネットワーク

ホイボン村でのホームステイを終え、国境地帯へと向かった。北タイの山間地域は、ミャンマー、ラオスと国境を接し、また古くから陸上交易の拠点ともなっていた。そういった背景もあって、この地域は非常に多様な民族集団が入り乱れる、民族のモザイク状態が形成されているという。リス族の集落があったかと思えば、そのすぐ側にラフ族の人々が住み、また中国系住民のコミュニティも存在するという趣である。しかも、この地域にはタイ政府によってミャンマーから連れてこられた通称、首長族と呼ばれる人々も観光村に押し込まれて暮らしているという。そういった混在状態の中で各民族を見分けるポイントは、衣服や住居の構造である（例えば中国系なら土間、山地民なら高床など）。車窓からはリス族の人々や、中国系住民の住居等が確認された。

北タイ山地は古くから、山と河と海を繋ぐ重要な交易拠点となっていた。中国から流入した回教徒の隊商が北タイ山地を拠点に交易活動を展開していたようである。この地域はメコン川を遡上すれば中国雲南省に達し、またラオスの古都ルアンプラバンもアクセス可能である。そしてチャオプラヤ河に至れば、そのままバンコクまでのルートも確保され、陸路でインド洋側のモールメインへと向かうこともできた。ただメコン川を下ってサイゴンへと至るルートは、途中で瀑布があるため船舶航行ができず、交易ルートはあまり発達しなかったようである。一見閉じた山間部というイメージがわく北タイ山地であるが、古くから発達した外部とのアクセスによって、外の世界とのつながりを持ってきたようである。そういった交易ルートを通じた外部との関係が、北タイ社会にどのような影響を与えてきたのか、興味は尽きないところである。

北タイ国境地帯には、中国の存在がそこかしこに見受けられる。私たちが訪れたメーサロン（Mae Salong）には、中国国民党の残党による中国人コミュニティが存在し、山稜にお茶畑が広がっていた。なぜお茶かというと、同じく中国国民党が入り込んだ台湾から、お茶栽培を導入したのである。また中国語学校も設立されており、ここで中国語を習得して台湾の大学へと進学するというルートが確立されているそうである。国民党のつながりが、メーサロンと台湾との関係を作り出しているということだ。

また中国の存在は経済の面でもかなり大きいようである。メコン川に面するチェンセン港を訪れると、そこには中国雲南省からメコン川を下ってきた貨物船が何隻も係留されていた。雲南から北タイへと向かうメコン川は、元来浅瀬が多く存在し、大型船の通航は困

難であった。しかし、中国 - 北タイ間での貿易を行うため浅瀬の河床爆破を行い、大型貨物船の往来を可能としたのだった。そしてここ 5 年の内に、チェンセン港は中国からの農産物や工業品を満載した船舶が大量に訪れる一大港へと変貌したのである。今や経済大国となった中国の拡大が、北タイ国境地帯にも一部ではあるがはっきりと見える形となったといえる。

国境地帯とは何かしらの変化が、かなり私たちの目に映りやすい場所であると感じる。北タイ国境地帯はゴールデントライアングル（ミャンマー、ラオス、タイの国境がメコン川を挟んで接する場所）に代表されるような境界を超える動きが、社会に強く影響する地域であるといえるだろう。

（文責：小林篤史）

Title of Lecture: Villages of Ethnic Minority and Border

Lecturer: Shigeru Kimura (NGO Expert)

Keywords: environment, cultural exchange, crossing boundaries, labor movement, commodities trade

Summary

The Northernmost area of Thailand is home to a multitude of ethnic minorities, different in their ways of living but sharing a land they call home.

Doi Mae Sa Long, a community famous for its cool environment, abundant tea plantation and tea products holds an intricate history that is traced back to the tumult after World War II. The earliest inhabitants were from the Kuomintang army of General Chiang Kai-shek who fought against the communist forces of China. Refusing to surrender, these soldiers marched on, reached the area and eventually sought asylum. At present, Mae Sa Long is a hub of exchange between Chinese and Thai culture.

Moving further north is Mae Sai on the border of Thailand and Myanmar, a place where boundaries are crossed each day. As the political and structural divide between two countries, Mae Sai is a thriving center for both business and leisure. Goods and labor are transported through the two countries as visitors from all over the world take advantage of the rich cache of goods and available services.

Reporter: YAP, Cherry Amor